

2022年7月31日（日）「愛は律法を覆う」

ガラテヤ 5:13-15

13 きょうだいたち、あなたがたは自由へと召されたのです。ただ、この自由を、肉を満足させる機会とせず、愛をもって互いに仕えなさい。14 なぜなら律法全体が、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句において全うされているからです。15 互いにかみ合ったり、食い合ったりして、互いに滅ぼされないように気をつけなさい。

### 【序論】

ガラテヤ書の中心テーマは「キリスト者の自由」。キリスト者とは、罪と律法の束縛から解放された存在である。罪赦され、神との自由な関係に入り、それらの縄目から解き放たれたのです。では、その「自由」を生きるとはどういうことなのか。今日の箇所では、その答えが与えられています。14節によると、それは私たちの隣人を「愛する」ことによって実現するようです。しかし、そのように言うことは簡単なのですが、隣人を愛するという事柄は分かるようで分からない。自分にとっての「愛」が、実は相手にとって「愛」ではないこともあるからです。愛しているはずが、実は干渉、依存、支配、甘やかしであったり、自分の心の隙間や傷を埋めるための行動であったりするかもしれません。このように「愛する」ということにおいて不確かさを抱える私たちに、今日の箇所は一つの方向性を示してくれています。

### 【本論】

#### 本論A. キリスト者の自由

**きょうだいたち、あなたがたは自由へと召されたのです。ただ、この自由を、肉を満足させる機会とせず、愛をもって互いに仕えなさい。(5:13)**

ガラテヤ教会の人々は、キリスト者になるとは自由を得ることだという真理を、全く理解していなかったわけではありません。彼らなりに「自由」と思われる生き方を志してはいたのです。しかしながら、パウロは彼らが信じている「自由」にどうしても違和感を覚えざるを得ませんでした。それは、自由を得たなら何をしてよいという「放縦」に走っていたと思われるからです。罪は赦されているのだからあとはどんな生き方をしてもいいというのは、自由の履き違えです。パウロは、彼らが陥っている状態を「不自由」と認識しています。

その具体的な結果として、教会内に抗争が生じていたようですが、その状況は 15 節を読むと分かってきます。

**互いにかみ合ったり、食い合ったりして、互いに滅ぼされないように気をつけなさい。**

「噛み合う」(δάκνω) という動詞は、元々蛇が噛みつくことを表す言葉でしたが、魂を傷つけ、深い傷を負わせ、非難することで相手の心を引き裂くことの比喻として用いられるようになりました。これに続く「食い合う」(κατεσθίω) という動詞と併せて、動物的な闘争をイメージさせる醜い争いが信者同士でなされていたことが想像されます。パウロは、このような争いは「互いを滅ぼす」結果を招くと指摘しています。

人と人が争うところには「不自由」があるのです。これは、「自由とは何か」という問題に反対側からアプローチしているとも言えます。自分の正当性を一方的に主張し相手の人格を無視した言動を続けるなら（それはつまり「聞かない」「受け止めない」ということですが）、そこには必ず衝突が起きてくるでしょう。誰もが自分の言い分を聞いてほしい、理解を示してほしいのであって、頭ごなしに否定されるのは辛いことです。これが罪ある人間生来のコミュニケーションの方法であるなら、罪赦された者の一つの変化は、相手の言い分に耳を傾けられるようになるところに現れる。

もう一度 13 節に戻りますが、「**あなたがたは自由へと召された**」という表現は、5:1 で言われていたことの反復です。

**この自由を得させるために、キリストは私たちを解放してくださいました。** (5:1a)

このところの原文を見ると、面白い表現が使われていることが分かります。「自由へと自由にした」と、語根を同じくする名詞と動詞が使われているのです。私たちは、神との関係における自由が与えられた中で、「愛する」という自由を選び取ることができる。自由とは、罪のために乱用するものではなく、誰かを愛することによって本当の意味で実現するものなのです。

**ただ、この自由を、肉を満足させる機会とせず、愛をもって互いに仕えなさい。** (5:13b)

ここに出てくる「肉」ということばは、肉体のことではなく、「自己中心性」「エゴイズム」と呼ばれるものです。これは神の御霊に属する生き方ではありません。自分の自由をどこまでも追求すると、それによって誰かが傷つくことになる。心において大人になるとは、相手の必要のために自らを抑制できるようになるということであって、これは一見不自由を選択しているようでありながら、実は自由を選び取っているのです。しかも、それは誰かから強制されて仕方なく抑制しているのではなく、自発的に、相手にとって益となることを考えて、自らの主張を制限しているのです。「聞く」ということにつなげてみるならば、自分の言い分を一旦脇に置いて、相手の思いを受け止める「心の柔軟性」です。

## 本論B. 隣人を愛する自由

13 節後半で「愛をもって互いに仕えなさい」と言われています。「仕える」(δουλεία) という動詞は、「奴隷」「隷属」という語と同じ語根を持っていて、キリスト者は自ら進んで相手のしもべとなるべき存在であることが示されています。しかし、5:1b では「二度と奴隷の軛につながれてはなりません」と言われていただけに、どことなく混乱を覚える方もいらっしゃるでしょう。律法の束縛から解放されることと、人に対して自らしもべとなることとは両立するのだろうか。不思議なことなのですが、両者はピタリと一致するのです。私たちはどのようにして律法から解放されたのでしょうか。神の愛に捉えられたからです。神が私たちを無条件に受け入れてくださったから、もはや「何かをしなくては」神に近づけない存在ではなくなりました。この無条件に受け入れられている自分の存在は、隣人に対する心のゆとりをもたらします。私たちは人と人との関係において、「こうでなければならない」という律法から解放されたのです。だから、相手の言い分にも一理あるかもしれないと考える柔軟性が生まれてくる。

なぜなら律法全体が、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句において全うされているからです。(5:14)

パウロも、主イエスの教えを受け入れていたのでしょうか。主も同じように教えておられました。ある律法学者とのやりとりの中で…、

「先生、律法の中で、どの戒めが最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つの戒めに、律法全体と預言者とが、かかっているのだ。」(マタイ 7:12)

ここで主イエスは二つのことを教えておられます。第一に神を愛すること、第二に隣人を愛すること。この二つをもって旧約聖書全体に現された神の御心が全うされる。ところが、パウロはここで、第二の戒めだけを取り上げて「律法全体が全うされている」と言っている点が気にかかります。彼は主イエスの教えから勝手に「第一の戒め」を落としてしまったのでしょうか。ニグレンという人の見解では、パウロはギリシャ哲学的な「神への愛」と混同されるのを避けようとしたということのようです。しかし、私はもっとシンプルに理解しています。つまり、「神を愛する」ということがガラテヤの信徒にとって律法になってしまっていたから、彼はむしろ神に愛されているということに集中させようとしているのでしょうか。そして、その結果として「隣人を愛する」ということが起きてくると。しかし、これもまた律法になってはいけません。御霊に満たされる時、人は霊的に大人になる。霊的に大人になると、隣人のことを考えられるようになる。

では、私たちにとって「隣人」とは誰なのでしょう。当時のユダヤ人は、隣人とは同胞または完全にユダヤ教に改宗した人を指すと考えました。クムラン教団では更に特化され、隣人は教団構成員を指すと考えられていました。しかし、主イエスは「では、隣人とは誰を指すのですか」という律法学者の問いに対して、「良きサマリヤ人のたとえ」を語られました。当時いがみ合っていたユダヤ人とサマリヤ人という関係性が前提とされて語られた、まさに常識をひっくり返すたとえです。ここでは、ユダヤ人が善とされているのではなく、むしろ「罪人」と見なされていたサマリヤ人が、敵であるユダヤ人が傷ついているのを見て介抱してあげています。主イエスの中で、民族的な隔ての中垣は存在しなかったのです。主イエスは、忌み嫌われていた「遊女」「取税人」「罪人」という人々とも親しく食事をされました。この新しい思想は、人と人との関係に「自由」をもたらしました。本書のパウロの教えにもつながっていきます。

**ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男と女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです。（ガラテヤ 3:28）**

主イエスは、完全に利己主義から解放されていた方であった。その人生におけるあらゆる場面で、「愛する」ということを選択することができたのです。主は人の目を恐れませんでした。「罪人」と食事をすることで「奴らの仲間だ」と噂されようがぶれることはなく、「安息日だから仕事をするな」と言われても堂々と癒しの業を行なわれました。その心に葛藤がなかったということではないでしょう。しかし、主はどんな時にも祈りながら、愛が律法を超える、いや、愛は律法を全うするということを示されたのです。

## 【結論】

私たちの人生も選択の連続です。主イエスの論理では、「隣人」とは私たちが関わりを持っているすべての人ということになります。今日出会うその人に対して、自分は自己を優先するのではなく、その人を第一として考えることができるだろうか。私たちが何かを判断していくとき、一歩立ち止まり、主イエスならどうされるかということを中心に問うてみたいと思います。家族との交わりの中においても、それは身近に転がっているやりとりの中にあるでしょう。そのチャンスの一つひとつ大切にしていきたい。それを積み重ねていきたい。そのようにして、私たちはキリスト者として成熟していくのです。

## 【祈り】

人にまことの自由をもたらし給う、天の父なる神様。人は自己中心の中に生まれ、不自由な存在として歩み始めます。どこまでも「自分」というものに縛られているのです。しかし、主イエスは完全に自分を捨てることのできるお方でした。自分のいのちにすら執着しておられませんでした。そして、私たちにそれを与えてくださいました。この愛に捉えられた私たちにも同様の自由をお与えください。神と隣人を心から愛する者とならせてください。まず、最も身近な人の心に耳を傾けるところから始めていくことができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
自己中心という不自由のうちを歩む者に、解放の道を示し給う、父なる神の愛、  
地上の生涯にあつて、何ものにも囚われず、ご自身のいのちさえも与え給うた、主イエス・キリストの恵み、  
信じる者の内でいのちの泉となり、隣人に向けて注がせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。